
DOG DAYS もう一つの世界

REMON

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DOG DAYS もう一つの世界

【著者名】

Z0721BA

【作者名】

REMON

【あらすじ】

勇者としてフローニャルドに召還された『シンク・イズミ』その勇者召還に巻き込まれた少年『神崎 優人』
この物語はそんな誤召還された彼の話。

プロローグ

桜も咲き始め、天候は快晴、ポカポカと暖かい春の朝。

「…………優…………！」

「…………優…………人…………！」

「優人！」「

「あ？ どしたシンク？」

……寝てたみたいだな俺。こここの校長の話は長すぎるんだよ。困つたもんだ。

これだから終業式とかの類いは苦手なんだ。

「早く行こう。飛行機の時間に遅れる」

「りょーかい…………ふああ…………ねむ」

「そんなに眠たいなら飛行機の中で寝なよ」

「そうする…………」

俺達は今日、飛行機でイギリスに行くので終業式を早退することになっている。

俺とシンクが走って教室に荷物を取りにいく途中……

「ん？ イズミ、神崎、どうした？ 早退か？」

廊下ですれ違った先生に声をかけられた。

「すいません。飛行機の時間がありまして」

走りながらシンクが答える。

「そうか。気をつけてな」

「はーい」

俺がスポーツバッグをとつてシンクに声をかけようとすると、シンクが窓を開けて外に出ようとしていた。

「おいシンク、なんで窓から出るんだよ」

「今いちのほうが近いからね。優人も早く来なよ」

教室の鍵と窓の鍵はどうするんだと思ったが、細かいことは気にしないことにした。

「わかった。すぐに行く」

窓を出て細い道を横に行き下に進むと、ちょうど校門を上から見下ろせる場所にきた。

「シンク、俺が先に行くよ」

いつものように飛び、着地した。

あつ、スポーツバッグ置いたまだ。

「シンク。悪いけど俺の荷物も一緒に持つてきてくれないか？」

「オッケー」

シンクはそう言つと、二つのバッグを上空に投げ、跳んだ。すると、突然短剣のような物をくわえた犬が、シンクの着地地点の近くに走ってきた。

「やこの犬、さっせと離れ！」

しつしと手で追い払おうとするが、無視。犬はくわえていた短剣を地面にさした。

次の瞬間 マンガやアニメにでてきたそつないピンク色の魔法陣のようなものが出てきた。

「ちょつ！ うあ！」

俺は突然出てきた魔法陣の中に落ちた。わけがわからない！ 落ちてる！ 何で！ さつきまで地面だったのに！

「ええ！ 何これえ！ エ――――！」

上方からシンクの声が聞こえる。

これがすべての始まり。

この先の世界で起こる出来事が俺の人生を大きく変えるきっかけになることを俺はまだ知らない。

プロローグ（後書き）

誤字・脱字、があれば感想で報告してくれると助かります。
『この表現はおかしい』といつといふも教えていただけた幸いで
す。

初めての戦闘（前書き）

初心者ですが精一杯頑張ります。
駄文ですが、見てくれると嬉しいです。

初めての戦闘

「うおおおー…… なんで空にいるんだよおおおー……」

おかしな空間をぬけると俺は はるか上空にいた。

「落ちる……」

森に突っ込んでいく。

地面まであと数メートル。もうダメだ……！ そう思つたとき俺の体は数秒間、空中で止まつた。

そしてゆっくりと地上に降りていつた。

何だつたんだ？ 今のは……？

……あの犬が出した魔法陣みたいなやつ……あの時と同じだ……。ほかの人に話しても信じてもらえないだらうと思つて隠していたが、俺はさつきの魔法陣を知つてゐる……。色は違うがあのときとほとんど同じだ。

「やつだ！ シンクはー？」

周りを見回したが、シンクの姿はなかつた。周囲には、たくさんの木や草が多い茂つている。

近くに生えている見慣れない植物に目を向ける。

あんな植物見たことないぞ。こんなところ紀乃川市には無かつたよな……。

とつあえずこの森を出るか。

近くにあつた俺のスポーツバッグを見つけて立ち上がつた。

「ん？」

スポーツバッグの横に何か落ちている。

近づいてよく見るとそれは、刀のようなものだつた。

「これは……刀か……？」

落ちている刀を拾い、鞘から抜く。

綺麗な刀だな……

刃は白銀に輝いていて、棟は漆黒に染まっている。

ガサガサッ

近くの草むらが音を立てた。

「？」

音がする方に振り向いた瞬間、何かが飛び出してきた。
その何かは突然、俺の腹部に体当たりをしてきた。

「ぐはあっ！」

激痛が走る。

俺は吹っ飛ばされ、後ろの木に叩きつけられた。

意識が一瞬飛ぶ。

だが俺はなんとか気絶せずに済んだ。

意識が朦朧とする中、俺は体当たりしてきた何かに目を向ける。

「……狐！？ 犬！？」

俺に体当たりしてきたのは、狐か犬かよくわからない獣だった。

獣は荒々しい息をたてながらこっちを睨んでいて、今にも飛び掛つて来そうな感じだった。

このまま逃げたとしても、どこまでも追いかけてきそうだな……。

右手に握られている刀に視線を落とす。

……これならなんとかなるかもしれない。

俺はよろよろと立ち上がり、刀を両手で持ち、構える。

俺が刀を構えた瞬間、獣は襲い掛かってきた。

グッと柄に力を込める　手の甲の上に空色の紋章が現れた。

「なっ！」

足元にも空色の紋章が現れた。紋章の中央には、交差した剣が描かれている。

「なんだよ……これ……」

刀身の周りを空色の光が覆つた。

獣は突然出てきた紋章に驚いたのかその場で固まっている。

今だ！

俺は地面を力強く蹴り、走った。

「早っ！」

何故か俺は一瞬で獣の前に移動した。

そして、斬った　獣の首を。

獣の首は宙を舞いながら地面に落ちた。

獣の死体など見たくなかったので、目を逸らそうとするがその獣は、砂のように細くなりどこかへ消えてしまった。

「ひ……」

俺は田の前で起きた信じられない出来事の数々に呆然としていた。
……よくわからないけど、とりあえず助かったみたいだな。
まさか親父に刀の扱い方を教わったのがこんなところで役に立つとは……。

アイツが行方不明になつて、親父と母さんが海外に仕事に行つてからは、あまり刀に触つてなかつたのによく使えたな、俺。やつぱり体が覚えてるのかな？

「いや～お見事で！」ざわつた

背後から声が聞こえてきたので、警戒し刀を構える。
そこには、長身で茶色の髪の女性が立つっていた。

「だれだ……ていうか何で狸耳と狸尻尾！？」

刀を向けられているにもかかわらずその女性はいつせい動じていない。

「そんなに警戒しなくてもいいぞ！」ざわるよ。拙者はただその刀を取りにきただけでいる

俺が握っている刀に人差し指を指す女性。

「えつ？ この刀あなたのだつたんですか？」

「じつは、この辺りで休息をとつていたときこそ、うっかり置き忘れてしまつて探していたので！」ざわるよ

うつかりで刀を忘れたりするなよ……でもそのおかげで俺は助かってわけだが……。

「危なくなつたら助けにいりつて聞いていたでござるが、拙者が手を出すまでもなかつたでござるな」

十分危なかつたと思つんですけど！？

「そういえば、自由紹介がまだだつたでござるな。拙者は、ブリオッシュ・ダルキアン。

ビスコッティ騎士団、自由騎士、オンミツ部隊頭領でござるわ」

ビスコッティ？ 騎士？ オンミツ部隊頭領？ 聞き慣れないワードに『惑いながらも、俺は自由紹介した』

「俺は『神崎 優人』です。あつこつちだと、『コウト・カンザキ』ですね」

刀を鞘に收め、ブリオッシュさんに刀を返す。

「お館さま～」

女性らしき声がした。

声がした方に目を向けると草むらの中から、金髪でスタイルのいい狐耳と狐尻尾を持つ女の子が出てきた。狸耳の次は狐耳かよ。

「お館さま、早くしないと戦が終わつてしまつござるよ」

「ユキカゼか、すまないすぐ行くでござるよ」

「あれ？ そちらの方はお館さまのお知り合いですか？」

「拙者もさつとき会つたばかりで」」ざる。ユキカゼと紹介してくれ

「了解です。お館さま」

ユキカゼと呼ばれた金髪の女の子は自己紹介してきた。

「拙者は、ユキカゼ・パネットーネ。ビスコッティ騎士団、自由騎士、
オンライン部隊筆頭
にござる」

「俺は、ユウト・カンザキです」

「優人殿は何故、このよつなフロニヤ力の弱い森に武器も持たずに
入つたのでござるか？」

自己紹介を終えた俺に、ブリオッシュ・シユさんが尋ねてきた。
フロニヤ力……？

「話すと少し長いんですけど……」

「優人殿は異世界人でござったか……では順番に説明するでござる」
と、
話をした。

「優人殿は異世界人でござったか……では順番に説明するでござる」

ブリオッシュの話をまとめるとこりだ。

あの魔法陣は、『勇者召喚』という異世界から勇者を召喚する儀式

で、国の領主がその儀式を行うことができる。

異世界から召喚された者は、召還台といつて来るのだが俺はこんなところに召還された。それはブリオッシュさんとコキカゼさんにもわからないらしい。

その儀式でやつてきた者は、元の世界に帰ることはできない。だから勇者召還は滅多に行われないらしい。だが、遠方の異国においては帰ることができたという話もあるとか。

帰る方法については、ビスコッティ国立研究学院に頼んで探しでもらうことになった。

シンクは今ビスコッティ共和国という国の勇者として『戦』に参加している。

この世界での戦は、殺し合いの戦争ではなくスポーツ競技会的なイベント。『戦興業』として国が開催している。

俺を襲つたあの獣は、『魔物』というもので、魔物にはいくつか種類があり、俺を襲つた獣のようなものもいれば、土地神という生物が魔物になることもあるらしい。

信じられないことばかりだが、実際に起つてることばかりなのでから信じるしかない……。

魔物に勇者それに魔法みたいな術……まるでベッキーの好きなファンタジー小説の世界だな。

「拙者とコキカゼはこれから戦を見にいくが、優人殿も一緒にどうでいざるか？」

「いいんですか！？」

「 カウガニード、ジゼルヌ」

「Jの世界の戦には少し興味がある。ぜひ一度見てみたい。

ブリオッシュさんは、右手で指笛を吹いた。
すると草むらから、黄色の怪鳥と紫色の怪鳥が飛び出してきた。紫色の怪鳥は、鱗の黄色の怪鳥より大きい。紫色の怪鳥の背中にには、赤いスカーフを巻いた白い犬が乗っている。

「えーと……Jの鳥と犬はいつたい……」

「Jの鳥はセルクルとコットフローヤルドでは、移動するときなどに使われているんだ」

「Jの鳥は拙者らと回じオノミシ部隊の『ホムラ』でJゼルヌ」

ユキカゼさんが黄色のセルクルに飛び乗りながら言つ。
ブリオッシュさんも、紫色のセルクルに飛び乗つた。

「 優人殿は、拙者の後ろに乗るでJゼルヌ」

ユキカゼさんの後ろに乗る。

「 しつかり掴まつてこるでJゼルヌよー。」

ユキカゼさんがそういいつつ、Jのセルクルは前へと進みだした。

「 言ひ忘れていたでJゼルヌが『さん』は不要でJゼルヌ。あと話すときはふつうでかまわないでJゼルヌよ」

「 なら俺のことも『優人』って呼んでくれないか?」

「心得たで〜」
『』

ユキカゼは、「ココと笑った。
うん可愛い。」

「ユキカゼ、ちょっといこか？」

「どうかしたで〜」
『』

「ちよつと速くないか！？」

「やつで〜」
『』

ユキカゼは平然とした顔で答える。

「すぐに慣れるで〜」
『』

慣れるつて……。

てこうか一人も乗せてるのにけつじつ早になこの鳥。

森をぬけると放送のようなものが聞こえてきた。

『』
『勇者降臨〜！〜』

「勇者？ シンクか？」

「優人、あそこあそ！」

ユキカゼが空を向いている。

俺も空を見上げると、そこには四角いモニターのよつなものが浮かんでいて、シンクが次々と兵士を棒で倒しているところが映し出されていた。

「勇者殿は珍しい物を武器にしてるでござるな」

ブリオッシュさんは興味津々にモニターを見ている。

「シンクに棒を使わせたら、その辺のやつじゅまつたく相手にならないと思いまさよ」

「それなら今度、手合わせしてみたいでござるな」

「もう少しでよく見える場所に着くでござるよ」

ユキカゼはそつそつと速度を上げた。

「到着でござる」

二人はセルクルから飛び降り崖に向かつて歩きだした。俺も飛び降り、一人について行つた。

「いや～間に合つてよかつたでござる」

「そうですね、お館さま

二人は横に並んで、少し下を向きながら話している。
俺はブリオッシュの隣に立ち、下を見る。
たくさんの兵士が戦っているのが見える。

「優人殿。あそこで『じざるよ』

ブリオッシュさんが指を指したところに視線を向けると、シンクと
緑髪の女の子がいた。

シンク達の前には、兵士の大軍が押し寄せていた。

シンクはオレンジ色の紋章、緑髪の女の子は水色の紋章を背後に出
し、シンクは棒、緑髪の女の子は一本の短剣を振り下ろし、兵士の
大軍に向けてオレンジと水色の閃光を放つた。

一色の閃光は轟音をたてながら兵士をすべて吹き飛ばした。

「今のはいつたい……」

「あれは『紋章砲』といって紋章術の一種で『じざる』

「紋章砲はフロニヤ力を輝力に変えることで、自分の武器から撃ち
放つことができる『じざるよ』

ブリオッシュさんが説明した後にユキカゼが付け加えた。

「なるほど……」

とは言つたものの全然わからん。
でも俺も紋章砲使つてみたいな……練習したらできるようになるか
な……。

後で聞いてみるか。

初めての戦闘（後書き）

更新は毎週、金曜日、土曜日、日曜日、のいずれかに一度、必ず行います。一度以上行つこともあるかもしれません。

誤字・脱字、があれば感想で報告してくれると助かります。
『この表現はおかしい』というところも教えていただけないと幸いです。

アドバイスは大歓迎です。感想も待っています。

閣下へS勇者&親衛隊長（前書き）

お気に入り登録、評価して下さった方、見て下さった方、ありがとうございます！
めちゃくちゃ嬉しいです！

紋章砲を放つたときに出た煙の中から、一本の矢がシンクめがけて飛んできた。

エクレールは、シンクの前に立ち一本の短剣で防御する。

「くつ……！」

「「うああー。」

エクレールは防御しきれず、シンクを巻き込み後に吹つ飛ばされた。

「ほんのちびっと期待をして来てはみたが……しょせんは犬姫の手下か」

シンクとエクレールが声のした方を見上げると、セイヒは白髪で長い髪の女性が黒いセルクルに乗っていた。

「レオンミシリ姫！」

「姫様？ あっちの？」

白髪の女性は人差し指を口に近づけ、

「チッチ……姫などとさやすべ呼んでもいいことはないのよ

「我が名は『レオンミシリ・ガレット・デ・ロワ』ガレット獅子団領国の王にして、百獣王の騎士、闇下と呼ばんかー。この無礼者

が！』

レオン＝ミシルはさすがに黒い髪で背後に緑色の紋章を出現させた。

『来たー！　来ました！　レオン＝ミシリ閣下！　戦場到着ー。』

『愛機ドームも相変わらず凛々しいー。』

「グアッガーーー！」

黒いセルクルが雄たけびをあげる。

「はははー！　それはさて置き、ワシは先に進ませて貰おう！」

「ちよー。」

「あつー。」

「勇者！　邪魔だ！　どけ！」

「いや、やつむかわー。」

シンクとエクレールは同時に立ち上がりましたが、うまく立てなかつた。

閣下に吹っ飛ばされたとき、シンクの上にエクレールが乗つて倒れたためだ。

シンクはエクレールをどかそつと手を伸ばす。その手はエクレールの胸に当たった。

「うえっ

エクレールは顔を赤らめる。

「え？ あ、ごめん」

シンクはエクレールの胸を何回か揉んだ。

「……女の子？」

「あっ……あ……あ……」

エクレールは相当ショックだったのか、口を大きく開けながら固まっている。

彼女は一度顔を下げる後、涙目で顔を上げて、

「！」のあとすっとこの勇者があああ！

シンクはエクレールに空に向かって大きく吹っ飛ばされた。

「うわあああ！」

『おおつと仲間割れか？ そしてこの勇者、意外とアホか？』

「何やつてんだ、あいつは……」

「エクレールは相変わらず元気やつでなによつでいるわね」

「エクレール？」

「せつから勇者殿と一緒に戦っていた、女の子の」とドーリーはるよ

ユキカゼが二口一口しながら答えた。

せつからシンクと一緒にいる緑髪の女の子は、エクレールという名前らしい。

シンクのことだ、どうせエクレールを怒らせるようなことを言ったんだろ。

「せつからレオンなんたらつていう女の人はだれなんですか？ 中継の人が閣下とか言つてましたけど」

「あのお方は、『レオン＝ショリ・ガレット・デ・ロワ』ガレット獅子団領の姫、領主でござる」

大丈夫なのか姫様が戦に出ても……でも戦に出るくらいなんだから強いのかな。

『すうい！ レオ閣下と愛機ドーマ、まさに人機一体の勢いでホールエリアを抜けていきます！』

『そして難関！ すべすべ床のつり橋エリア！ ビスコッティ兵士たちも頑張つて迎撃しております！』

『最終防衛線まであと少し、ロードが今回の決戦の場か！？』

「駆け抜けるぞ、ドーマー！」

「グアアッグアー！」

ドーマは地面を蹴り、飛んだ。

「「やせるかあああー..」」

シンクとエクレールが、坂を猛スピードで駆け上がり、レオンミシェリに向かつて跳ぶ。

レオンミシェリはシンクとエクレールを田の前まで引きつけた後、ドーマから跳んだ。

二人はお互いの武器をぶつけてしまい、エクレールの一一本の短剣の内一本が欠けてしまった。

レオンミシェリが空中で斧を出して、それを手に持ち紋章砲を放つ。紋章砲はシンクとエクレールに直撃し地面にたたきつける。ドーマは向こう側に着地すると、盾をレオンミシェリに投げ渡した。

「うう……」

「いたたた……」

「勇者！お前は何なんだ！戦いの邪魔をしにきたのか！？」

「そつちこそ！僕の邪魔を！」

シンクとエクレールが言い争いをしていると、背後から緑色の光が

出てきた。

二人は言い争いをやめ、光に目を向ける。

そこには斧を天に掲げ背後に紋章を出しているレオンミシェリがいた。

「どりやああ！」

レオンミシェリは斧を地面に叩きつけて足元に紋章を出現させた。

「獅子王炎陣！」

地面からレオンミシェリの周りを覆うように無数の火柱が上がり、空からは火の玉が降り注ぐ。

火柱と火の玉は兵士達を次々とけもの玉へと変えていく。シンクとエクレールは跳躍してなんとか回避した。

「紋章術つて……こんな事まで……」

「レオ姫のはケタが違う！ 倒されたくなれば……」

火柱がシンクとエクレールに迫ってくる。

「「とにかく逃げる！」」

レオンミシェリは再び斧を天に掲げ、

「大爆破！」

その言葉でシンク達がいたエリアに大爆発が起きた。

『爆破あああ！ レオンミショリ閣下必殺の『獅子王炎陣大爆破』範囲内にいるかぎり立つていられる者はいない』といつ超絶威力の紋章砲！』

「す、」……

俺はあまりの光景に思わず口に出してしまった。

「シンクとエクレール大丈夫か……？ やられたんじや……」

「大丈夫でござるよ」

「え？」

ブリオッシュさんは空を見上げている。
俺も空を見上げたが、そこには何もいなかつた……が、よく目を凝らして見てみると人影のようなものが降つてくる。
シンクとエクレールだ。

「どうやって……」

「おそらく紋章術を使って空に逃げたのでござります」

……紋章術ってそんなことができるのか。
ますます紋章術を使いたくなってきたな。

「フランボワーズ！ 確認せい！ 勇者ヒターン!!せむやんと死んだか？」

レオンミシーリは斧を肩にかけて、放送席に向かつて叫ぶ。

『あー、はーっー。』

『えーとですねえ……』

『そり簡単に、やられるとああああー。』

はるか上空から女性の声がした。

『こしても高すぎない！？ ねえ、これ高すぎないー！？ あーーー！』

『そつ、空あー！ 勇者と親衛隊長、無事ですー。』

『だが、これではレオ闇トの的だぞー。』

レオンミシーリは一ヤコと笑い、斧を空から落ちてぐるシンク達に向けて構える。

「貴様と手柄を分けたくなどないが、一人でからねばどうにもならん」

「へ？」

「協力だ！ わたきのタイミング、今度は外さん！」

「オーライ！」

エクレールは体勢を変えて、

「よおしー 行つて来い！」

と、シンクを蹴った。

「ひでえ——！」

『蹴つたあああ！』

レオンミシェリが、落ちてくるシンクに狙いをつけ、斧を振るう。対するシンクはレオンミシェリに棒を振り下ろす。斧と棒がぶつかり合う。結果、シンクは押し負け、後ろに飛ばされた。

シンクは空中で体勢を立て直し、地面に着地する。

それとほぼ同じタイミングで、エクレールはレオンミシェリの後ろに着地した。

シンクとエクレールが同時に走り、武器を振るう。レオンミシェリは手に持った盾と斧で防ぐ。しかし……耐え切れず斧と盾は完全に破壊された。ガレット側の総大将の敗北は目前。

シンクとエクレールは一度距離をとつてもう一撃いれようとするが、しゃがんで回避された。

二人は素早く向きを変える。

「「はああああー。」

「こればかりはよけることができずレオン//シヨリの防具はすべて破壊された。

「ふうーん、チビと垂れ耳相手と思いつづく少々悔つたか。このまま続けてやつてもよいがそれでは、ちと回国陣へのサービスがすぎてしまふのう。」

「レオ閣下、それでは……」

「ん、ワシは//ソロ降参じや」

その瞬間、一つの光が上空に上がり、花火のよつて空に広がった。

『まさか……まさかのレオ閣下敗北！ 総大将撃破ボーナス三百五十点が加算されます』

『今回の勝利条件は拠点制圧ですので戦終了となりますが、このポイント差は致命的、ガレット側の勝利はほぼ無いでしょう』

上空のモニターにマイクを持った閣下が映し出され、撮影班からインタービューを受けている。

閣下はすごいな。二人同時に相手をしているにもかかわらず、手を抜いているようだつた。……閣下が本気を出したらどれくらい強いのだろうか。

そんなことをモニターを見ながら考へてみると、マイクを持ったエクレールが映し出された。

すると、

ビリッ

エクレールの服がパンツを残してすべて破れた。

『勇者、向と自軍騎士に誤爆う！ 防具破壊を超えて服まで破壊してしまいました！』

おおおー！ これはいいものが見れた！

こんなこと滅多にないだろうからよく脳裏に焼き付けておけ！

後でシンクに礼を言わないとなー！

俺がさつきの映像を田舎を駆け回るといふ想像してみると、ブリオッシュ・ショパンが声をかけてきた。

「フローニャルドの戦はどうだったか？」

田舎を開け、ブリオッシュ・ショパンを見上げた。

「いい戦いも見れたしどしても面白かったですー！ こんな戦なら俺も出てみたいです！」

「なら今度の戦に参加してみてはどうでしょうか？」

「え？ だけど俺はシンクみたいに勇者として呼ばれただけでもないの……」

「戦にはミルヒオーレ姫の許可があれば、誰でも参加できるで」
「みるよ」

「やつなんですか？ でも俺なんかの話を姫様が聞いてくれるかど
うか……」

ミルヒオーレ姫……たしかビスコッティの領主……だつたかな？

「心配無用で」
「優人殿が戦に参加できるようこ、拙者が姫様
に頼んでみるで」
「わる」

「いいんですか！？ でも……何でそこまでしてくれんんですか？」

「拙者は優人殿に少し興味があつてな、優人殿がどんな戦いをする
か見てみたいので」
「わるよ」

ブリオッシュさんは白い袋から巻物と筆と墨を取り出して、近くに
あつた平らな岩の上に巻物を広げると、慣れた手つきで見たことの
ない文字を書き出した。

「ユキカゼ。あれはこの世界の文字か？」

「やつで」
「わるよ。『フローニャメガ』といつてフローニャルドでは、
ほとんどの者が使つているで」
「わる」

あれがこの世界の文字か。

「できたで」
「わる」

ブリオッシュさんは巻物を丸め、立ち上がった。

「ホムラ。仕事を頼みたいで」「やる」

それを聞いたホムラはセルクルから飛び降り、ブリオッシュュさんのところに駆けてきた。

「これをお姫様に届けてほしこで」「やる」

ブリオッシュュさんが、ホムラの首に巻いてある赤いスカーフの中に巻物を入れる。

「ワンー。」

ホムラはクルリと振り返り走っていった。

ブリオッシュュさんはホムラを見送ると、俺を見た。

「戦では紋章砲があると何かと便利で」「やれやれ。拙者らは今夜、フイリアンノ城に戻る予定で」「やるが、それまでの間でいいなら拙者が教えるで」「やるよ」

「本当ですかー。ぜひお願ひします 詩匠ー。」

「詩匠?」

「あ、すいません。いけなかつたですか?」

「べつにかまわないで」「やるよ。ときには優人殿は武器を持っていかつたで」「やるな」

「あつ……戦に出るなら武器がないと困りますよね……」

「そつだ俺、武器持つてないんだった……。」

「なら拙者のこの刀を貰つてほしこでござる」

「師匠は俺が魔物との戦闘で使つた刀を渡してきた。

「ありがとうございます、大事にします！」

「この刀、重とも長ともちよつと軽くて使いやすかつたんだよな。

「ところで、紋章砲の練習はどうですか？」

「この近くにいい場所があるでござる。今からもう二回かうござるよ」

俺達はセルクルに乗り、師匠が知つていよいよ場所へと向かった。

更新は毎週、金曜日、土曜日、日曜日、のいずれかに一度、必ず行います。一度以上行つこともあるかも知れません。

誤字・脱字、があれば感想で報告してくれると助かります。

『この表現はおかしい』というところも教えていただけると幸いです。

アドバイスは大歓迎です。感想も待っています。

今回は三人称が多めです。今後も一人称と三人称が混ざることもあるかもしれません。いまいち一人称と三人称の違いがわからないんですね……。もつと勉強しないと。

ダルキンアン卿とユッキーが使う『じぎざる語』（作者命名）が難しいです。口調つて意外と難しいです。書いてて何回も、『これはこうでいいのかな?』ってなりました。作者だけかな? w

この前DOG DAYS ドラマBOX vol.3がアマゾンから届いたので、聴きました。いや~よかつたです。一期が待ち遠しいですね。あと、vol.3に収録されている「Miracle Colors」がすゞく気に入りました。

「ミケ行きたかったな」……エクレの抱き枕カバーほしかった……。

明日はGS4の発売日ですね。開闢持つてなかつたからすごく助かります。

一月はDT14、オメガ、GS4があるので財布が軽くなりますねw
そうそう、DOG DAYSの設定資料集も買わないといけませんね。

紋章術（前書き）

昨日投稿しようと思つていたんですが、忙しかつたので今日こじました。

「オノミシ部隊って具体的にどんなことをするんだ?」

前でセルクルを操っているユキカゼに聞く。

「任務のためにビスマルトイを離れ、諸国を巡つてこのドーリーの
が……すまなこでござる……詳しことは話せないでござる」

「そつか……」

言えないと云は大事な任務なんだ。任務についてはこれ以上聞くのはやめておくか。そういえば、そつきいろんな国を巡つてゐつて言つてたよな。もしかしたらアイシのこと何か知つてるかも。

「歸匠。一つ聞きたことがあるんですけど云々ですか?」

「かまわないでござるよ」

「ユキカゼも聞いてくれるか?」

「了解でござる」

「勧者を召還する儀式は、ほかの国もできるんですね?」

師匠は首を縦に振る。

「一年くらい前に色が違つだけで今回の儀式とほとんど同じものを見たことがあるんです。そのとき近くにいた『神崎 光』っていう

名前の女の子が消えたんです

「神崎……優人殿の『家族で』いるか？」

「はい……俺の妹です」

あの日……光は、俺や親父や母さんに何も言わず消えた。血毛の庭に紋章が描かれて、光はその中へと入つていった。その場面は今も記憶の中に鮮明に残つてゐる。

「こんな国を巡つている師匠とユキカゼなら、光のこと何か知ってるんじゃないかと思つたんですけど……」

「優人殿の話を聞いた限りでは、光殿は勇者として召還された確率が高そいでござるが……悪いでござるな、何も知らないでござる」

「そうですか……」

「ユキカゼは何か知つてるか？」

「拙者も何も……」

師匠もユキカゼも光のこと知らないか……まあ簡単にわかるわけないよな……。けど、この世界にいるかもしれないってことがわかつたからよしとするか。

とりあえず、シンクと合流しないとな。光のことは後で考えよつ。

「到着でござる。ここなら思つつきり練習できるでござるよ

「おお……」

「ここは空き地のようなところで、大きな岩がいくつかある。それ以外には目立った物は何もなく、果てしなく広い。紋章砲のような技を練習するにはもってこいの場所のようだ。」

「さつそく始めるで!」
「さあ、前方に見える『**刀**』

師匠は鞘から刀を抜いた。

「はいー。」

俺も鞘から刀を抜く。

「まずは紋章を発動させる」

「えっと…… どうですか?」

俺の手の甲に空色の紋章が現れる。

「全身に力を込めて紋章を強化する」

師匠の背後に明るい紫色の紋章が出現した。紋章は大きく鮮やかになる。師匠の紋章に描かれている交差した剣……俺のと似てるような……いかんいかん集中集中。

俺は意識を集中させ、全身に力を込める。

「紋章術の力の源、フロニヤ力を自分の命の力と混ぜ合わせ、輝力に変えて武器から打ち放つ!」

「はあああー!」

同時に刀を横薙ぎに振るい、俺は空色、師匠は紫色の閃光を放つ。一色の閃光は、巨岩に命中。爆発音がして煙が上がる。自分の思った方向に撃つのは難しいな。なんとか岩に当たりはしたけれど。……煙が晴れるとそこには岩の残骸が転がっていた。紋章砲ってすごい威力だな。

「す、すごいやがるよー！ 優人！」

「え？」

振り返ると、ユキカゼが驚きの眼差しで俺を見ていた。

「紋章砲をこんなに早く使えるようになる者はそういないでござるよ」

「そうなのか？」

「俺にはどのくらいすごいのかわからないが、ユキカゼの驚き方を見る限りすごいことなんだろ？」

「ただ、狙いやコントロールが甘いよね、要練習が必要でござるよ。今の優人の紋章砲は実戦で使うにはやや厳しいでござる」

最後にユキカゼの手厳しい言葉。

「うう……頑張ります……」

シンクが普通に使ってたから俺もいけると思ったのに……。

「紋章砲を使った後は少し疲れるで」*ヤハハハ*。

「どうですか？　俺は別に疲れてないですよ」

その言葉に師匠は驚きの顔を見せた。

「……それは本当で」*ヤハハ*？

「は」

師匠は顎に手を当て、「将来が楽しみで」*ヤハハ*な……」と楽しそうに呟いた。

「どうかしたんですか？」

「いや、何でもないで」*ヤハハ*。

「それより優人殿。あと二つ紋章術を教えたいので」*ヤハハ*。

「どんな紋章術なんですか？」

「口で囁つより見たほうが早いで」*ヤハハ*。

師匠は近くにある大きくて少々丸みのある岩の前に移動し、田の前の巨岩に向けて刀を構えた。

もしかしてあれを刀で斬るのか？　いつたいどうやつて……。

師匠の刀の刀身を明るい紫色の光が包み込む。

あの光！　色は違うけど俺が魔物と戦ったときもあんな光が刀身を覆つたな。あれは紋章術だったのか。

そして跳躍、岩のてっぺん辺りまでくると刀を振り下ろす。

「お館さま。その紋章術なら拙者、得意でござりますよ」
「いい、と生徒のよつに手を擧げるユキカゼ。
俺は紋章術を解き、刀を鞘に収めた。

「紋章術って武器を強化する」ともできるんですね

この紋章術があれば刀が破損する心配はないな。

「戦では武器同士をぶつけ合ひことが多いからな。一般兵ならともかく騎士級が相手となればこの紋章術は必須でござる」
「なら、特に覚えないといけないってことですね。なんとなくですが、師匠を見てたらやり方がわかつたからやつてみますね」

この紋章術は魔物と戦つたとき、ほとんど無意識とはいえ一度使えてるからきっとできるはずだ。

刀を構える。

まずはフローニャ力を輝力に変えて…………こんなカンジか。

刀身が空色の光に包み込まれた。

「この紋章術もこんなに早く使えるようになるとは…………これなら身体強化の紋章術もすぐに使えるよつになるでござりまつ」

「身体強化？」

「師匠が地面に着地すると、巨岩が真つ二つに分かれた。
すごい……あんな大きな石を刀で斬った。師匠は刀を鞘に収めるとこつちに戻ってきた。

「うむ、任せたで」*ざるよ*、*ユキカゼ*「

「優人、拙者が教えてもいいで」*ざるか?*」

「ああ、もちろん」

「まずは簡単なやつからこくで」*ざるよ*「

*ユキカゼ*はその場でしゃがみ、足元に黄色の紋章を出現させて、真上に高く飛んだ。綺麗に着地すると、今度は俺の周りを走りだした。その速さは俺の田ではまつたく追えないくらい速い。

「と、基本的なのはこれくらいで」*ざるよ*「

*ユキカゼ*は俺の田の前で止まる。

「す、いな、*ユキカゼ*!」

パチパチと賞賛の拍手を*ユキカゼ*に送る。

どうやら紋章術はジャンプ力を上げたり、走るスピードを上げたりもできるみたいだ。

紋章術つてほんと便利だな。

「いや~それほどでもないで」*ざるよ*~

手を頭の後ろに当てる、元々かな顔をしてくる。

「とつあえずやってみるよ」

俺はユキカゼのようにしゃがむと、足元に空色の紋章を出現させる。この紋章術もほとんど無意識だったけど一度使えてるから大丈夫だろ？。ジャンプするのは初めてだけど。

脚に入力を入れ、跳ぶ。軽くジャンプしたつもりだったんだけど、結構高く跳べるんだな。体勢を立て直し、地面に着地した。

「とても初めてとは思えないで」
「

ユキカゼは驚いたような目つきで俺を見ている。

「ユキカゼ。ちょっとこの辺を走ってへる」

俺はユキカゼに背を向けて、紋章を発動させる。

「走るほうがコントロールが難しいで」
「やるから氣をつけるだけ」
「

「わかった。気をつけるよ」

最初は軽めにいくか。俺はその場から駆け出す。

ユキカゼの言う通り、この紋章術はコントロールが難しいな。けど、だんだんわかつてきただぞ。そろそろ師匠とユキカゼのところに戻るか。二人がいるところに方向を変える。帰りはさっきよりも速くなるか。

俺は速度を上げたが、まずいことになった。止まれない。
調子に乗ってスピード上げるんじゃなかつたッ！ 四苦八苦しながら止まらざるとする。

ユキカゼと師匠が見えてきた。
あの一人、話し込んで俺に気づいてないぞー。やばー！ このままだとユキカゼに当たる！

「ユキカゼッ！ 避けるー！」

俺の叫び声にユキカゼが「え？」と言ひながら、うちを見た瞬間、俺は石につまづいた。

「うああー」

そのまま俺はユキカゼに抱きつくよう、「ぶつかり、ユキカゼを押し倒して滑るように地面を進み、止つた。

「ふはあ」

俺はユキカゼの柔らかい双丘で息ができなかつたため急いで顔を上げた。

「ユキカゼ、大丈夫か？」

「いたたた……大丈夫でござる……」

見たところ怪我はなさそうだな。
ほつと息をつく。

「そろそろ拙者から下りてほしこのでござるが……」

「あ、悪い」

すぐ離れて、手を差し伸べてユキカゼを立ち上がらせた。

「二人とも無事でござるかー？」

師匠が駆けて来た。

「俺は大丈夫です」

「拙者も問題ないでござります」

「優人殿は、けものだまになれないゆえ危ないでござるわよ」

「反省します……」

ここに来る途中にユキカゼから聞いた話だが、フローニャルド出身の人は一定以上ダメージを受けると、けものだまという姿に変化して怪我を防ぐことができるらしい。だけど、異世界出身の俺やシンクはけものだまになれない。だから紋章術を使うときや戦では注意が必要なのだ。

「優人、足元に何か落ちてるでござるわよ」

「え？ あつ…」

落としてしまったペンドントを拾い上げる。

「危うくなくすとこだつた……。サンキュー、ユキカゼ」

多分セツセツけたときにポケットから落ちたんだろう。失くさないようにつけておくか。

大事なペンドントだからずっとつけておきたいけど、学校じゃそういうのは禁止だからなあ……。

「綺麗な水色でいるわるな……」

ユキカゼが俺のペンダントに田を奪われている。

「ワンー　ワンー！」

犬の鳴き声、ホムラだな。

手紙を姫様に届けて帰ってきたんだろう。

ホムラに田を向けると、赤いスカーフの中に巻物が入っていた。

「ホムラよくやつたでいるよ」

ユキカゼがホムラの頭を撫でている。ホムラはとても嬉しそうな表情をしている。

ユキカゼは赤いスカーフから巻物を取ると師匠に渡した。

「これは……」

師匠は笑みを浮かべている。

面白いことでも書いてるのかな？

「朗報でいるよ、優人殿」

「????？」

「優人殿も戦に出られると聞いてるよ

「本当ですか！」

「戦はもう始まっているでいるよ。急いで向かうでいるよ。今回

の戦のルールは現地に向かいながら語る「J'AI

まさかこんなに早く戦に参加できるなんて！ いやー楽しみだ！

紋章術（後書き）

更新は毎週、金曜日、土曜日、日曜日、のいずれかに一度、必ず行います。一度以上行つこともあるかもしれません。

誤字・脱字、があれば感想で報告してくれると助かります。

『この表現はおかしい』というところも教えていただけないと幸いです。

アドバイスは大歓迎です。感想も待っています。

主人公の優人は最初から凄く強いというわけではありません。フローニャルドに来た初日に紋章砲を一応使えるようになつてしているのでそこそこチートかもしませんが。w

今の優人の強さはシンクと同じくらい。紋章術はシンクより下手、といったカンジです。優人はこれから色々な経験をして少しづつ強くなつていきます。

次回はミオン砦編です。

冬休みも終わりですね。あつという間だつた気がします。

初陣（前書き）

お気に入り登録して下さった方、評価して下さった方、見て下さった方、ありがとうございます！

「初めての戦闘」の会話を一部変更しました。ストーリーは一切変わつていませんし、これから変わることもありませんのでご安心を。

主人公が自己紹介するときに、『神崎優人』と言っていましたが、『コウト・カンザキ』に変更しました。

おつ、砦が見えてきた。けつこう派手にやつてるな。ピンクの光が砦を攻撃している。まるで大砲みたいだ。見たところ森から撃つてみたいだな。あれも紋章術なんだろう。

「ひさしごりの戦、楽しみでござる」

ユキカゼが嬉しそうな口調で呟いた。

戦が楽しみか……地球では考えられないな。あれ？ ピンクの光が出なくなつたぞ。

「どうやら捕者の友がピンチのよつぞるるな」

ユキカゼはセルクルから飛び降りた。

「ちよつ！ ユキカゼ！ セルクルはどうあるんだよー。」

「優人に任せたでござるー！」

そつ言つてユキカゼは走り去つていつた。

無茶な」と言つなよ。セルクルの動かし方なんてわからないぞ。

「師匠！ どうやって動かせばいいんですかー？ ……つて、いねーー！」

つこわづきまで隣にいた師匠が消えていた。やばいぞ置いていかれただ！

「優人殿――！」ひちで「ざるよー！」

前方から師匠の声が聞こえる。

俺は師匠の姿を確認すると、セルクルに、

「頼む！ 師匠についていってくれ！」

と、頼んでみる。

「グアー！」

セルクルは雄たけびを上げると、スピードを上げた。師匠との距離がどんどん縮んでいく。

この鳥……人の言葉がわかるんだな。

「優人殿、今回の戦のルールはちゃんと覚えているで「ざるか？」

「えつ、あ、はい。バツチリです」

少し前に今回の戦のルールを師匠から教えてもらつた。

敵兵は片っ端から倒してOK。戦の勝利条件は姫様の奪還。それができなければビスコッティは敗北する。今回はそれに加え、今夜行われる姫様のライブに間に合わせなければならない。

細かいルールもまだあるみたいだが、今夜の戦は最低限これだけ覚えていれば大丈夫とのことである。

「ここから入れそつで！」やるな

「紋章術を使えば余裕でいけそつですね」

俺と師匠は紋章を発動させて、跳躍。砦に侵入。砦に入つた俺はさつそくシンクとエクレールを見つけた。

二人は大勢の兵士達に囲まれている。状況はあまりよくない。

「師匠、どうしますか？」

師匠に判断を仰ぐ。

「拙者に任せるとどうぞ」

「「J」の俺様とお！ 百機を越えるガレット戦士団相手にい、ひよつこ勇者とお見習いに毛が生えた程度の小娘があ……抵抗出来るつてんならあ……やつてえみやがれえええ！」

大男が鉄球つきの大戦斧をシンクとエクレールに振り下ろそうとしている。

師匠は紋章を発動させてブーメランを投げるような手つきで大太刀を投げた。大男はそれに気づき、振り返る。

「ぬあああ！」

大声を上げて、戦斧で防いだ。大太刀は宙を舞い、地面に突き立つ。あのおっさん、紋章も使わずに弾きやがつた……なんて力だ……。

「「J」の刀は……！」

エクレールが師匠の刀を見て、声を上げた。

「塔馬より失礼仕つた」

皆にいる全員の視線が師匠に集まる。

「久しぶりで、」やむなエクレール。しばらく見ないうちに大きくなつた

「ダルキアン卿！」

エクレールは目を輝かせている。

「優人！？ 何でここに…？」

「よおーシンク！ 加勢に来たぞ！」

目を丸くしている仲良しの友人に声をかける。

「勇者、ダルキアン卿の隣にいるヤツは知り合いか？」

「うん。僕の友達」

「ダアルキアンだとも……」

大男は師匠に視線を向ける。

「いかにも。そこの大将軍と勇者殿にはお初にお目にかかる」

「ビスコッティ騎士団、自由騎士、隠密部隊頭領、ブリオッシュ・ダルキアン」

師匠は巻物を大男に見せるように広げ、

「騎士団長ロラン殿からの要請を受け、助太刀に参った！」

「あつ、危ない！ 後ろ！」

シンクが声を上げた瞬間、近くの高い建物から矢が放たれた。

「 紋章剣」

師匠が抜き打ちの構えをとり、背中に明るい紫色の紋章を出現させた。

「 烈空一文字 ！」

師匠は矢が放たれた方に、刀を横薙ぎに払った。

矢は衝撃波のようなもので全て吹き飛ばされ、弓兵達がいる建物は綺麗な紫色の光が大きく弧月状に斬り裂いた。建物は歩兵ごと地面へと落下していく。兵士達は叫び声を上げながらけものだまへと変化していった。

これが師匠の紋章術……。

「いやあ～、助かったでござるよ、勇者殿」

「あつ、いえ！」

「おつ、登場の途中でじやつたな……えーと、どこまで話したか？」

師匠が隣にいる俺に聞いてきた。

「え？ 忘れちゃったんですか？」

「まあともかく押しかけ助つ人の推参でござる。されば、いや尋常
に」

師匠が刀を兵士達に向けると、皆の外から花火が上がった。
おおー、夜だから昼間より綺麗だな！」

「勝負でござる」

「花火いー！　だれだ！　あんなもの上げたのはーー！」

甲冑を纏つた兵士が怒り口調で振り返り、歩兵に尋ねた。
……しかし歩兵からの返事はなかつた。突如、歩兵達が白い煙を上
げ、けものだまに変化した。

けものだま達の背後にはユキカゼが立っていた。

「うがあががあー！」

甲冑を纏つた兵士は驚いた顔でユキカゼを見ている。

「拙者、ビスコッティ騎士団、隠密部隊筆頭」

「おのれえー！　いつの間にーー！」

「ええ……最後まで言わせてほしいでござる」

「 紋章拳」

ユキカゼの手の甲に黄色の紋章が浮かび上がる。そのまま田にも止まらぬ速さで兵士に接近し、

「ユキカゼ式体術。 狐流！」

兵士の腹部に拳を叩き込み、甲冑を破壊する。

「蓮華昇！」

今度は腹部に蹴りを入れ、上空に吹き飛ばす。

「つおおおおああい！」

ユキカゼは兵士のところまで一瞬で移動し、懷から小刀を取り出した。

「斬 ！」

小刀を振り下ろす。無防備な兵士が耐えられるはずもなく、けものだまに変わる。ユキカゼは綺麗に着地。

「ビスコッティ騎士団、オンミツ部隊筆頭、ユキカゼ・パネトーネにござる。忍 」

「ユッキー！ 花火も砲弾もゲットしてきたありますよ～！」

リコッタが大きな袋を二つ持ちながら、ユキカゼに向かって走つて

めた。

「ナイスドージャのココー。」

ユキカゼはソロシタをおぶつた。

「それじゃあリコ。わたくしみんなの支援に向かうで、」

「了解であります！ ユッキー！」

ユキカゼはその場にしゃがみ、足元に黄色の紋章を出現させ、ジャンプ。

二人はものすごい速さで皆の中に入つていった。

「おつやー。おめー。」

歩兵が俺に剣を振り下ろしてくる。俺はその動きに合わせて横に一歩だけ動く。

ほかの歩兵も俺に剣や斧を持って襲いかかってくるが、同じようこ横や後ろに避ける。

「どうした？ そんな攻撃、俺には当たらないぞ？」

「はああつー。」

俺は紋章を発動させて刀を横薙ぎに払い、歩兵達に空色の斬撃を飛ばし、けものだまへと変化させた。

「エクレー、なんか、なんかす”いんだけど」

「ぼやくな、走れ！」

エクレールは水色のセルクルに飛び乗った。

「ダルキアン卿！ エクレール・マルティノッジです！」

「おう！」

「我々は中に突入いたします！ 姫様の救出に！」

「おお、存分に努めてくれで”やれぬ」

師匠はエクレールと話しながら歩兵達の攻撃を避けている。

「ここは拙者と優人殿とユキカゼに、はああつ！」

師匠も紋章を発動させ、刀を横薙ぎに払い、紫色の斬撃で歩兵達をけものだまに変えていく。

師匠は振り返ると、先程師匠の攻撃をあつさりと防いだおっさんに切つ先を向ける。

「任せせるで”やれるよ」

「うし！ 片済いたか」

刀を鞘に収める。

俺はけものだまに変化した歩兵達に田を向ける。張り合ひの無いやつらだったな。俺も騎士級とかいうヤツと戦つてみたいもんだ。師匠はあのでかいおっさんと戦つみたいだし……。姫様の救出に行つた一人の加勢にでも行くか。

「師匠、シンク達の加勢に行つてきます」

「おお、優人殿、頼んだでござる」

「行いかせるかあー！」

おっさんは俺に鉄球を投げてきた。

俺はギリギリのところで鉄球をかわし、シンク達が向かつた方に駆けていく。

「危ねえーだろ、おっさんー！」

「だああれがあー！ おっさんだあー！ パドウイーン・ドコールと呼べえー！」

おっさんはついこながら、鉄球を自分のところへ戻す。

「じゅあなおっさんー！ また今度なー！」

「おっさんー！ おっさんー！ 三つなあー！」

おっさんはおっさんって呼ばれるのが相当嫌みたいだな。呼び方を変える気は全然ないけど。

ドーン！ 大きな音が響き渡った。

だれかが戦ってるみたいだな。行ってみるか。

俺は敵にばれないように高らかにエクレールの戦いを見ていた。

「よこしまつヒー！」

虎耳の女の子が身の丈ほどの戦斧をエクレールに振るひ。エクレールは上空に飛び、回避する。

すごいな……あんな大きな斧を軽々と振り回してやる。

「ノワ！」

「了解」

黒いネコ耳の女の子が、黒い光を纏つたナイフを投げる。

エクレールは紋章を発動。一本の短剣のうち一本を振るい、水色の斬撃を飛ばして防ぐ。

そういうや、エクレールの紋章の色って俺のと似てるよな。俺のほうがほんの少し濃いかな？

着地すると、黒い光を纏つたナイフが次々とエクレールを襲うが、なんとかかわしていく。

「ベール」

「はあーい

今度は兎耳の女の子。紋章を発動させて、矢を放った。
エクレールが背後から迫る緑色の閃光に気づき、一本の短剣で防御した。

「くつ……！」

緑色の閃光の軌道を若干ずらして回避に成功。
防戦一方だな……まあ三対一ならしかたないか。おそらくあの三人娘は服装や得物から考えて騎士級。なによりあんなに強いのが只の兵士なわけがない。

「じおりやーー！」

虎耳の女の子がエクレールに再び仕掛けた。

エクレールは今度は避けようとはせず、一本の短剣で攻撃を受けた。
いや……避けなかつたんじやない、避けれなかつたんだ。ずっと三対一で戦つてたんだ、動きが鈍るのは至極当然のこと。

「くつ……！ うあああーー！」

エクレールは壁に向かつて吹つ飛ばされた。

俺は刀を上空に高く投げて飛び降りると、エクレールをお姫様抱っこして助けた。

「大丈夫か？」

「貴様はさつきの……！」

「コウト・カンザキだ」

俺はエクレールに笑顔で自己紹介した。

何故か彼女は顔を少し赤らめ、俺から視線を逸らした。

「……エクレール・マルティノッジ」

俺はエクレールを下ろす。

「ん？ 何だ？ ジーと見て、私の顔に何かついてるのか？」

「いやあ、エクレールって近くで見るとけっこう可愛いなあって思つてさ」

こうして間近で見るとふつうに可愛い。
すると、エクレールはさつきとは比べ物にならないくらい顔を赤らめた。

「きつ、貴様はこんなときに、なつ！ 何を言つてこりー！」

「そういえば、姫様のコンサートまであまり時間が無いんだったな

俺は落ちてくる刀をキャッチし、鞘から刀を抜き、切つ先を三人娘に向けた。

「さつあとケリつけて姫様のところに行くぞ、エクレール！」

初陣（後書き）

更新は毎週、金曜日、土曜日、日曜日、のいずれかに一度、必ず行います。一度以上行うこともあるかもしれません。

誤字・脱字、があれば感想で報告してくれると助かります。

『この表現はおかしい』というところも教えていただけると幸いです。

アドバイスは大歓迎です。感想も待っています。

前書きに書いた会話の変更の理由ですが、フローニヤルド人が自分の名を名乗るときは、『名、性』の順です。なのに主人公が『性、名』の順で名乗るとかわしいんじゃないかな? と思い、変更しました。

戦闘描写も難しいですねえ。普通の描写とは違った難しさがあります。こんな駄文ですみません……。
あー……戦闘描写もうまくなりたい……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0721ba/>

DOG DAYS もう一つの世界

2012年1月14日17時01分発行